

教 仏 庵 草

第189号
(発行日)
2006年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mailaddress--kousien2720kimyou
@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○真宗共学会——毎月第一と
第三木曜日午後7時より。
*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答②〇 第十七願その一

L「阿弥陀仏の本願は四十八通の誓いとして仏説無量寿経に説かれていますが、今回は大事な願である十七願についてお話しください。」

D「それは何も法蔵菩薩(阿弥陀仏)が自らの名譽をもとめられたのではありません。十方衆生に南無阿弥陀仏の名号を与え、それによって一切衆生を救済せんがためです。聖覚法印の『唯信鈔』に

D「仏説無量寿経によりますと、法蔵菩薩は一切衆生の苦しみを除きたいと願われ、五劫という長い間をかけて思案なされ、一切衆生を救う道を明らかにされました。その法を師の仏である世自在王仏の前で発表されたのが四十八願です。この中、第十七願は自らの名(阿弥陀仏)が十方世界の諸仏にほめられたという願です。十七願の願文はたとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ。」

(第十七の願に「諸仏にわが名をほめられるようにしたい」という願をおおこしになった。この願は深く心して頂かねばならぬ、軽々しく聞いてはならない。名号をもって一切の衆生を残らず導こうと思召されるゆえにこそ、この名号を諸仏にほめられたいと、かさねがさねお誓いされたのである。それでなければ、仏の御心に名譽を願われる

(現代語訳——わたしが仏になるとき、すべての世界の数限りない仏がたが、みなわたしの名をほめたたえ、称えないようなら、わたしは決してさとりを開きません)となつています。咨嗟とはほめたたえることです」

L「十七願で、なぜ十方世界の諸仏に阿弥陀仏の名がほめられたいと願われたのですか」

ということはありません。諸仏にほめられても何の所詮もないことである)とあります」

L「十方無量の諸仏に南無阿弥陀仏の名号がほめられ称えられたいというのは衆生を名号でもって導き、救おうとされるからですね」

D「そうですね」
*
L「諸仏に南無阿弥陀仏の名号がほめられることがどうして衆生に名号が与えられることにな

D「諸仏というのはほろもろの仏たちですが、この娑婆世界を教化してくださる仏はまずは釈迦牟尼仏です。数多くの他の世界(領域)は他の仏たちが教化されているといわれています」
L「仏教ではこの娑婆世界だけが世界ではなくて、多くの世界というか領域を認めているのですね」

D「ええ、そう説かれています」
L「娑婆を教化される仏が釈迦様なのでですね。そうすると諸仏に阿弥陀の名がほめられるというのは、私たちに与っては釈迦仏が阿弥陀の名号をほめたたえられることになるのですね」
D「ええそうです。釈迦仏が阿弥陀の名をほめられた経典が仏説無量寿経であり、さらには仏説観無量寿経や仏説阿弥陀経なのです。いわゆる浄土三部経です」

L「浄土の三部経を説かれることがどうして衆生に名号を与えていくことになるのですか」

D「これらの経典の内容は一言でいえば、釈迦如来様が私たちに「南無阿弥陀仏の本願の名号をいただいで浄土に生まれ仏になつてくれよ。南無阿弥陀仏の御名は一切衆生を浄土へいたらしめてくださる大慈大悲の誓いの御名だから」と説いてくださっているのです。それがとりもなおさず阿弥陀の御名をほめたたえることです。釈迦仏が名号を讃歎されるその説法を私たちが聞いて、それじゃあ私も阿弥陀の名号をいただいで浄土に生まれさせていたどうかとなり、衆生が本願の名号を信じて称え、浄土に生まれ往くのです。これが名号が衆生に与えられるのです」

《春季彼岸永代経法要》

3月22日(水)
午後2時始

(どなたでも自由にお参りください)
*道順——JR甲子園口下車。南出口を出て、ミスタードーナツ店横の道を南に。最初の信号の一つ手前の四つ角を東に曲がって50m。駅より4分。

L 「なるほど浄土の經典の内容を聞いて、私もお念仏をいただいて浄土に生まれようと願う、お念仏申しお念仏を信じる身になる。それが、名号が人に与えてくることになるのですね」

D 「ええそうなのです。卑近な例で申しますと、たとえば私が胃腸が悪いとします。ある信頼できる人がこの薬は非常に胃腸に良く効くよ、一度飲んでみませんか、薬をほめる。その言葉聞いて、それじゃ私も飲んでみようとなる。そのようにさとりを完成され信頼できる方である釈尊が阿弥陀仏の名号をほめ、（汝らこの名号をいただいて、これを信じて弥陀の浄土に生まれ、仏になってくれよ）とお説きくださる説法を聞いて、私もお念仏をいただいて浄土に生まれましょうとなれば、それが阿弥陀の名号が衆生に与えられていくことになるのです」

L 「よくわかりました」
D 「それで第十七願のことを諸仏称名の願とも、諸仏称揚の願とも諸仏咨嗟の願とも名付けられるのです。この願名の（称）は称讚するの意です。またそのことは、衆生が浄土に生まれゆく（往相）とところの法（名号）を与える（回向する）願といわれがあるから十七願は往相回向の願とも名付けられようと聖人の思し召しです」

L 「十七願では我が名を凡夫で

はなく諸仏にほめられたいといわれませんが、これはどういうお心ですか」

D 「仏の心を知り、仏の功德を知りたもうのは仏です。凡夫には仏の功德を知る能力がありません。この世のことも、あるものをほめるにはそのもの本當の値打ちを知らねばまともにほめることもできねば、ほめたことになりません。値打ちを分らずにただ口先だけでほめるのはおべんちやらずです」

L 「仏を知るのは仏である。凡夫は仏の功德の値打ちを知る力がない。ですから諸仏にほめられたいと誓われるのですね」

D 「ええそうです。以前こんなことがありました。私のかかりつけのB医師が（A医師は手術が非常に上手だ。私が手術を受けるときはA医師にしてもらおう）という話を聞いたとき、私も（手術をするならA医師にしてもらいたい）と思いました。それはなぜかという、医師の手術能力は素人には分かりません。たとえばサラリーマンの主婦が（A医師は手術が上手）と言ってもその話は当てにはなりません。素人には医療技術の能力を判断する力がないから、素人の主婦のいうことは信用できないのです。しかし、プロの医者同士の間で（あの先生は手術がうまい）という話ならこれは信憑性がありますから、私も是非そういう時にはB医師の言葉を信じてA

医師の執刀を受けたいと思いません。そのように阿弥陀仏の名号は一切衆生を平等に浄土に生まれさせてくださるお徳があることを、凡夫ではなくて眞実をさとりきつた仏たちがほめたたえてくださればこそ、私たちはそのお言葉を信じて本願の名号を信受するようになるのです」

*

L 「ではこの娑婆世界では阿弥陀の名号を讚歎されるのは具体的に釈迦仏だけですか」

D 「基本的にはそうですが、しかし阿弥陀仏の本願のお心を信じた方々が名号をほめたたえることも、諸仏の名号讚歎に等しいと聖人は見ておられます」

L 「なぜですか」

D 「阿弥陀仏のお心をいただいた人は阿弥陀仏の心が分かった人といえます。たとえ阿弥陀仏のお心を全面的に分からなくても。阿弥陀仏のお心が少しでも本當に分かった人は阿弥陀仏を知った人といえることができます」

L 「なぜですか」

D 「たとえば、海の水はどんなものか。海の水は非常に広大です。無量といっているほどの海水がどういふものか。それを極めることは人間はとてできません。しかし、広大な海水の2、3滴でも実際になめると、その人は広大な海水がどういふものか知ったといえなくはありません。その塩味を実際に経験したのですから、それは海水に触

れて（海の水とはこういう味がするの）と、海水が分かった人といえないことはありません。そういうように阿弥陀仏の無量のお心のほんの一端にふれた人でも、それは阿弥陀仏のお心が分かった人といえないことはありません。そのように信心をいだいた人は無量の信心のごく一部に触れただけの人であろうけれども、しかし信心が分かった人といえなくはないのです。ですから、聖人は信心の人は仏のお心を知った人ゆえ、信心の人を釈尊は諸仏に等しいとまで仰せくださっていると、お喜びになつておられます」

L 「聖人のどの言葉ですか」
D 「聖人は華嚴經にそのことが説かれ、また大經にも釈尊がご信心の人を親友と仰せくださつてであると、お喜びになられた。『消息』に華嚴經に、（信心歡喜者 与諸如来等）というは、信心をよるこぶひとはもろもろの如来とひとしいというなり。如来とひとしいは、信心をえて、ことによるこぶひとは、釈尊のみことには、（見敬得大慶 則我善親友）（見て敬い得て大きに慶わば、すなわち我が親友なり）とときたまえり。と仰せられています。ですから（信心の人の名号讚歎は諸仏の讚歎に位を同じくする）と先人はいわれるのです」

L 「七高僧や親鸞聖人や蓮如上人や名もなきご信心の念仏者が阿弥陀仏の名号をほめたたえてくださる。そのお働きは諸仏が名号を讚歎してくださるお働きに連なるものですね」
D 「ええそうです。」

*

L 「そうすると諸仏に我が名をほめられたという十七願に於いて諸仏は名号を讚歎される。その説法を聞いて私たちがお念仏を申す身になる、それのもとには十七願のお力なのですね」

D 「ええそうです。十七願は諸仏の名号讚歎の歴史を形成し、その名号讚歎の歴史に私たちが預かることによつて往生浄土の道を歩むことができるのです」

L 「そうすると釈迦仏は阿弥陀仏の第十七願に於いて名号讚歎の經典すなわち浄土三部經を説かれたことになりませんか」
D 「ええそうです。釈迦仏がこの世にお出ましになられたのは阿弥陀の名号を説かんがためであると、聖人は仰せられています。このことは正信偈に如来、世に出興したまうゆえは、ただ阿弥陀本願海を説かんとなり。（釈迦如来や諸仏がこの世にお出ましになるのはただ弥陀の本願名号を説かんがためである）と仰せられています」

L 「釈尊は第十七願の願に於いて、弥陀の本願名号を説くためにこの世に出現されたと仰せられるのですね」
D 「ええそうです」（了）

歎異抄

後序第九講

聖人のおおせには、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御こころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらしいか。

〔歎異抄〕後序より

◎現代語訳

親鸞聖人は、「何が善であり何が悪であるのか、そのどちらもわたしはまったく知らない。なぜなら、如来がそのおこころで善とお思いになるほどに善を知り尽くしたのであれば、善を知ったといえるであろうし、また如来が悪とお思いになるほどに悪を知り尽くしたのであれば、悪を知ったといえるからである。しかしながら、わたしどもはあらゆる煩惱をそなえた凡夫であり、この世は燃えさかる家のようにたちまちに移り変わる世界であって、すべてはむなしくいつわりで、真実といえるものは何一つない。その中であって、ただ念仏だけが真実なのである」と仰せになりました。

*

聖人は「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」と仰せられたと唯円坊様は伝えていきます。このお言葉が表している深さは私のうかがいおよぶことはでき

ませんが、ただいえることは親鸞聖人はご自分の（愚かさ）を本当に深く自覚しておられたことがこのお言葉から感じられます。

自分を賢いと思いこんでいる人や出来事を表面的に見る人や視野の狭い人ほど、物事の善し悪しを簡単に決めがちです。しかし、人生の深い底におりた人、人間の本性にふれた人、世界の真相に迫った人ほど、事の善し悪しの定めがたいことを身にしみて感じるように思えます。

大蔵大臣をし、長く日本経済を担った高橋是清氏が「自分がよいと思つてやつたことが失敗したり、どうかと思つたことが成功したり、また、人の善いということをして駄目だったり、人の悪いということが案外よい結果になったこともある。結局、本当の善悪は神仏以外には分からぬと知つた」と自伝に書いているそうです。

またこんな話を聞いたことがあります。昔、徳の高い僧がいて、嚴寒の冬、寺の近くの川にすんでいる魚がさぞ冷たいだろうとあわれみ、長い筒を作つてそれを川の中に沈め、魚の寝床を作つてやりました。ところがいつのまにかその筒が魚を捕る道具にされるようになったそうです。魚のために作つたものが魚を捕獲するものになってしまったのです。動機は善くても結果は逆になってしまふ。そういうことはこの世ではしばしばあります。

*

火宅無常の変転きわまりない中、煩惱具足の愚かな身には、物事の善悪を見極めることなどとてもできないと、親鸞聖人は仰せになっているのではないでしょ

うか。そして何が善いか悪いかを本当に知り抜きたもうのは如来ばかりである。

*

なぜ善悪の二つをはっきりと知り得ないのでしようか。それは、ここで聖人がいわれているように「煩惱具足の凡夫」だからでありましょう。根本煩惱に貪・瞋・痴の三つがあり、貪・瞋の煩惱の本に愚痴があります。愚痴とは愚かさであり、生と死を分けて生を愛し、死を憎み、自分と他者を分け、自らに執し他者にへだててしかものを見ることができない、いわば自己中心的な想念、それが愚痴です。ですから煩惱具足の凡夫は我執と我愛からものを見るという自己中心的な偏りをまぬがれません。親鸞聖人はそういう愚かな自分を感じておられ、ご消息にも「親鸞も偏頗あるものとききそうらえば」と申されて、自分は偏りのあるものの見方をする人間だと仰せられています。

*

そもそも倫理とか道徳は、人間社会の秩序を保つために約束事として生まれたといわれています。人間の心の本に愚痴があつて、愚痴あるがゆえに自分にとって好ましいものをむさぼり愛し、自分に好ましくないものには瞋り憎む。これを三毒の煩惱と仏教ではいつています。これが人間の心根です。しかし、この三毒の煩惱のままに生きるなら、社会は弱肉強食の地獄と化します。快樂原理と利害損得ばかりになります。損失を憎み、それをもたらすものはこれを傷害し、利はこれを奪い取り、利益を同じくするものとは徒党を組むようになります。殺し、盗み、詐欺、不倫が横行し人間同士が敵

と味方で常に争いをする事になって、お互いが非常な苦しみをこうむります。

そこで、欲しいものでもこれを抑制し、いやなことでもこれを受け入れて、お互いの安全を守りトラブルを避けようとなります。そこに倫理とか社会道徳というのが生まれてくるのでありましょう。

このように人間の心は愚痴が根になつていきますから、他者とあい対しても、自分をひいき目に見、とかく自分は善人であり他者は悪人に見えがちです。いわば私たちの善悪の判断は偏っています。そういう人間における善悪の判断の危なさや頼りなさを徹底的に自分の上に見られたのが聖人の「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」というお言葉ではないでしょうか。

一番危険なのは、自分のものの見方は間違っていないと思ひこみ、これは絶対に善であり、これは絶対に悪であると決めつけ、それを人に押しつけていくことでしょう。そういうものの見方にたいする無批判や無自覚、これがいかに恐ろしい事態を生み出すかは歴史の現実がいやというほど見せつけてきました。現今のブッシュのイラク戦争もこの偏りがないとはいえません。

*

そんなわけでこの「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」は、聖人自らが、善悪のことは如来の仏智が知り抜くようにはとても知れる私ではない、私は愚かな人間だと申され、そして愚かなればこそ、仏智から「この真実を受けよ」と与えられるところの「仏智によつて真実と定められた確かな真実」をいただき、これを「ただ念仏のみまこと」と仰せられるのでありましょう。（了）

【初めてのインド7】

(一九七〇年十月)

ラジギール(王舎城)に着いて、妙法寺に泊めて貰うことになった。夕食の案内があつて、ついに行く庭に出た。庭には粗末な長いすとテーブルがあり、ご飯と一品のおかずが置いてあり、おかずは菜っ葉の炊いたものだった。妙法寺の僧侶にいろいろ話を聞くと、おかずの菜っ葉は市場に行つて野菜のくずを八百屋さんからいただいたりするのだそうである。売れない野菜くずが妙法寺の僧侶の副食である。それを皆で合掌していただく。お世話になつた僧は成松上人といい、何年か前にたまたまインドをぶらぶら旅をしている時に藤井日達上人にあい、大変感化されて出家し妙法寺の僧侶となつたそうである。妙法寺の僧侶になるにはローソクの火で自らの腕を焼く。その痛みに耐えたものだけが入門を許されるので、成松上人も腕に大きなやけどの跡があつた。これは法華経の焼身供養という考えから来るのであつて、単なる覚悟試しではない。仏道精進の厳しい姿は一向の誰もが心を打たれた。その夜は近くにインドでは珍しい露天風呂があるというので入りに行った。天然の池のような温泉で2人ほどの現地人が入つていた。見ると下着を着けたままで入浴している。裸で入浴するのは禁止されているのである。仕方がないので下着を付けて入つたが、久しぶりに身体がお湯でほぐれていい気分になつた。次の日、法華経の従地涌出品に七宝の塔が出現したと伝えられている山に登る事になった。霊鷲山の隣りの山である。実に簡素なロープウェイがあつて、それに乗つて山の頂上まで行くのだが、ブランコのような踏み台に座り、両手で綱を持つだけの乗り物である。かなり怖い目をしながら頂上に着いた。山の頂上には小さなお堂がある。このお堂もロープウェイも妙法寺の人たちが造つたものだった。中にはいると祭壇は日本仏教の形式で、年配の日本人僧がおられた。八木上人といい、

妙法寺の僧侶の中でも厳しいので有名な方だった。オオカミも出るようなこの山に長年一人で住しておられる。お堂の後ろにドラム缶があつたので「何ですか」とお尋ねすると「風呂です」と答えられたが、八木上人から不屈の気迫を感じた。こうしてラジギールを後にし、次にナールンダ寺跡に行った。5世紀の初めグプタ朝の時に建てられた広大な寺の跡である。かつては一人ほどの修行僧が勉強と修行に励んだ学問寺であり、当時としては世界最大級の学問所だったといわれている。七世紀、玄奘三蔵もここで学びここで教えている。一三世紀にイスラム教徒によつて徹底的に破壊され、貴重な文物が失われた。多くの僧侶は各地に逃げ、その中でチベットに行った高僧たちが仏教をチベットに伝え、それがやがて優れたチベット仏教を開花させていった。発掘がかなり行われ、多くの僧坊、講義室、礼拝室跡がある。あちこちに頭部をイスラム教徒によつてそぎ取られた仏像が座しておられる。いまでも仏教的な感覚が深く漂う遺跡で、感動しないわけにいかない。こういう環境で何年も修学すればさぞ仏教も身につくだろうと思つた。とにかく静かで清らかである。ただどの仏像も首から上が破損しているのは痛ましい。入り口に博物館があつて発掘された遺物が展示されている。近くにナールンダ大学があり、大谷大学の長崎法潤先生がかつてこの大学で原始仏教を学ばれたと聞いていた。非常に印象の深かつたナールンダを後にパトナ市に向かつた。パトナは昔、アショカ王のマウリヤ王朝の都だった。パターリプトラである。飛行場があり、パトナからネパールのカトマンズに飛んだ。小さな飛行機だった。日本では考えられないがそこはインドのこと、特別サービスで機長が操縦室に我々を入れてくれた。そのおかげで、前方に広がる壮大なヒマラヤ山脈の光景を一望に見ることができた。